

ロドルフ・テプフェール『ジュネーヴ短編集』 における言語と地域性

古典と観光の狭間に立つフランス語圏スイス文学

加藤 一輝

はじめに

スイス文学とは何かを定義するのは難しい。いわゆる「スイス語」なるものは存在しないため、言語による定義ができないからだ。現在スイスではフランス語、ドイツ語、イタリア語、ロマンシュ語の4つが公用語とされており、地域ごとに異なった言語、さらに各語圏の中でも多様な方言が使われている。他方で、スイスという国もまた自明の存在ではない。今日のスイスの原形とされるのは、ハプスブルク家の支配に対抗して自治権を守るため 1291 年に結ばれた永久盟約であるが、最初はウーリ、シュヴィーツ、ウンターヴァルデンの3州で始まったこの盟約が次第に加盟州を増やして現在のスイスとなった、のではない。各州とも対等な自治権を持つ連邦国家となったのは、1798年にフランス共和国軍による侵攻を受け、一旦ヘルヴェティア共和国という中央集権国家となるも、1803年にナポレオン調停法によって連邦制となったのがはじまりである。フランス領となっていたヴァレー、ヌーシャテル、ジュネーヴがスイス連邦に加盟するのは、さらに 1815年のウィーン会議を待たねばならない¹。

あらかじめ定義するのが難しいのであれば、実際の作品を見てゆくりしかない。本稿では、スイス文学について考えるにあたり、ロドルフ・テプフェール Rodolphe Töpffer の小説に着目する。というのも、テプフェールはスイスが 19 世紀前半に国民国家として成立しつつあった時期の作家であり、また作風としても、言語はフランス語でありなが

¹ スイスの文学あるいは観光についての概括的な内容は、C・F・ラミュ『詩人の訪れ 他三篇』、笠間菜穂子訳、幻戯書房、2022；アリス・リヴァ『みつばちの平和 他一篇』、正田靖子訳、幻戯書房、2022；森本慶太『スイス観光業の近現代 大衆化をめぐる葛藤』、関西大学出版部、2022；Roger Francillon, *De Rousseau à Starobinski. Littérature et identité suisse*, Presses polytechniques et universitaires romandes, 2011 を参照した。

ら、パリを中心とするフランスの文壇に合わせるのではなくスイスの地域性を文学に表わそうとした最初期の作家であるからだ²。

ロドルフ・テプフェールは1799年にフランス領ジュネーヴで生まれた。名字から推測されるとおりドイツ系ではあるが、父ヴォルフガング＝アダムもジュネーヴの生まれで、シュヴァインフルト出身の家系だがドイツ語を書いたり話したりすることはなかったとされ、パリに留学して水彩画を学んでいる。フランス革命の勃発により帰国、しばらくは革命による混乱で不如意の生活を送るが、19世紀に入るとフランス皇后ジョゼフィーヌ・ド・ボアルネやロシア皇后マリア・フョードロヴナにも絵画を買われるほど国際的な画家となっていた。1812年にはパリのサロン（官展）で金賞を獲得、1816年には後援者を尋ねるためイギリスに出張している。

ロドルフは、こうした父の風景画取材に同行し、少年の頃からサヴォワを旅していた。学校教育を終えたらイタリアで絵画修行する心積もりもできていた。ところが19歳の頃、目の不調（飛蚊症のようなもの）が悪化し、専門的な眼科治療を受けるため留学先をパリに変更する。このパリ留学はロドルフにとって生涯唯一のパリ滞在であり、さまざまな分野の学識を豊かにする上でも、またフランス語話者ではあるがフランス人ではないという自覚を強める上でも大いに影響を及ぼしたが、第一目的であった眼病の改善は叶わず、留学中に画家の道を棄て、パリ大学では古典学者ジャン＝フランソワ・ボアソナード³に師事した。ただ、その後ジュネーヴに戻って寄宿学校の校長となったあとも、生徒や友人を楽しませるために線画と文字を組み合わせた絵物語の冊子を作り、公刊もしていた。これが現在でいうコマ割マンガ（Bande dessinée, BD）の起源とされている。

テプフェールの評価は常に揺れている。同時代のジュネーヴではマンガが人気を博していたが、たとえばサント＝ブーヴは小説を、バルバー＝ドールヴィイは旅行記を主に評価し⁴、近年では記号論的な関心

² ロドルフ・テプフェールの生涯あるいは作品についての概括的な内容は、森田直子『「ストーリー漫画の父」テプフェール 笑いと物語を運ぶメディアの原点』、萌書房、2019；森田直子「ロドルフ・テプフェールにとってのジュネーヴ、スイス、パリ」、『講演記録集 スイスの多言語状況とその文化面における影響』、國學院大學文学部共同研究、2020を参照した。

³ お雇い外国人として日本に近代法学をもたらしたギュスターヴ＝エミール・ボアソナードの父。

⁴ サント＝ブーヴについては後述。バルバー＝ドールヴィイのテプフェール評

から再びマンガの始祖として注目されている。本稿では『ジュネーヴ短編集 *Nouvelles genevoises*』としてまとめられた短編小説群を対象とし、作中に現われる地の文とは異なる言語に焦点を当てて、何を自分と違うものと看做しているか、そして自分と違うものをどれほど作中に取りこもうとしているかを測ることで、当時のフランス語圏スイスにおける自己規定の試みを明らかにする。具体的には、実際に言語そのものが違うラテン語と英語、それから言語としてはフランス語であるものの小説とは大きく異なる文体として挙げられている地質学者と観光客の記録について、順に取りあげる。

1. 出版経緯と収録作品について

本題に入る前に『ジュネーヴ短編集』の収録作品について簡単に説明しておく。というのも『ジュネーヴ短編集』は現在フランス語でも校訂版がなく、これまで出版されたものには大きく分けて二種類の版があるからだ。

そもそもフランスで『ジュネーヴ短編集』が出版されることとなったのは、『部屋をめぐる旅』の作者グザヴィエ・ド・メーストルが1839年にイタリアからロシアへ戻る途中でパリを訪れ、そこでサント・ブーヴのインタビューに応じた際に、テプフェールの短編をいくつか示してフランスでの出版を勧めたからである。グザヴィエは、出版者シャルパンティエから全集の新版を刊行するので何か作品を書き足してはどうかと水を向けられると、自分は作家ではなく最後に作品を書いたのも数十年前だからと、代わりにテプフェールの作品集を紹介したのだった。このいきさつは、サント＝ブーヴによる『両世界評論』誌の連載「フランスの近代詩人・小説家」シリーズ内の第33回であるグザヴィエの略伝に書かれている。

—— よく褒めていたのは、情感と諧謔の作風ということで彼に少し似ている、あるジュネーヴの機知に富んだ作家だ。書類鞆に何か新作の掌編が入っていないか訊ねると、「牧師館」、「遺産」、「伯父の書斎」、「渡航」、「アンテルヌ峠」、「ジェール湖」、つまりテプフェール氏

は Jules Barbey d'Aureville, *Les Œuvres et les Hommes*. XII. *Littérature étrangère*, Amyot, 1890 に収められている。

の著作選集を示して、フランスでも知られるようになってほしいと述べた⁵。

また、グザヴィエ自身も直接シャルパンティエに手紙を送っており、本人の言葉で同様の経緯が説明されている。

わたしの作品集に何か加えることはできないと、ご理解いただけたらさいわいです。とはいえ、あなたの親切な申し出にお応えしたいので、手に入れたばかりの本を何冊か送ります、それがわたしの本の続きとなるでしょう。自分の作品を書けない代わりに、ぜひ形にしてほしい作品を紹介するのです。わたしは著者であるジュネーヴのテプフェール氏と面識はなく、ただ作品を楽しく読ませてもらっただけなのですが、もし出版すれば、あなたも読者の方々もやはり楽しく読めるに違いありません。とくに、おどろおどろしい劇の後味が消えず、笑いとともに温かい涙を零させてくれるような本を読んで落ち着きたいという読者の方々に、作品を勧めることができるでしょう⁶。

この手紙を序文のように冒頭に置いて、シャルパンティエから 1841 年に刊行されたのが、フランスで最初出版されたテプフェールの作品集『ジュネーヴ短編集』だ⁷。この版には以下の作品が収録されている。今のところ各作品の表題の定訳がないため、原題も附しておく。

グザヴィエ・ド・メーストルによる出版者への手紙 *Lettre adressée à l'éditeur, par Xavier de Maistre*
牧師館 *Le Presbytère*
伯父の書齋 *La Bibliothèque de mon oncle*
遺産 *L'Héritage*
アンテルヌ峠 *Le Col d'Anterne*
ジェール湖 *Le Lac de Gers*
トリヤン峠 *La Vallée de Trient*
渡航 *La Traversée*
グラン・サン＝ベルナール *Le Grand Saint-Bernard*
恐怖 *La Peur*

⁵ Charles-Augustin Sainte-Beuve, « Poètes et Romanciers modernes de la France. XXXIII. Le comte Xavier de Maistre », *Revue des Deux Mondes* n° 18, 1839, p. 315.

⁶ Lettre à l'éditeur, Paris, 3 avril 1839. Xavier de Maistre, *Œuvres inédites de Xavier de Maistre*, t. II, Alphonse Lemerre, 1877, p. 111-112.

⁷ Rodolphe Töpffer, *Nouvelles genevoises par M. Töpffer, précédées d'une lettre à l'éditeur par le comte Xavier de Maistre*, Charpentier, 1841. 1 vol. (439 p.) ; in-18.

分量としては、「牧師館」が45ページ、「伯父の書斎」が3部構成の179ページ、「遺産」が5部構成の64ページ、と冒頭の3作のみ長く、ほかはいずれも20～30ページ程度の短編となっている。

一方、同じく1840年ごろ、テプフェールは、パリ在住の出版者である従兄のジャック＝ジュリアン・ドゥボシェと文通をはじめる。ドゥボシェは1843年にはパリで「イリュストラシオン」誌を創刊する。このドゥボシェが版元となって、著者による挿絵つき版『ジュネーヴ短編集』が1844年にパリで刊行された⁸。この版には以下の作品が収録されている。

序文 Préface (J.-J. DUBOCHET, éditeur の署名)

伯父の書斎

ふたつのシャイデック Les Deux Scheidegg

遺産

アンテルヌ峠

エリザとヴィドマー Elisa et Widmer

ジェール湖

渡航

トリヤン峠

グラン・サン＝ベルナール

恐怖

もちろん最も大きな違いはテプフェール自身による挿絵がふんだんに加えられていることだが、それを措いて、収録作品についてドゥボシェ版が先行のシャルバンティエ版と異なっているのは、1.グザヴィエ・ド・メーストルの手紙がなくなって出版者ドゥボシェによる短かい序文に替わっている、2.「牧師館」が省かれている、3.「ふたつのシャイデック」「エリザとヴィドマー」が追加されている、4.「渡航」「トリヤン峠」の順序が入れ替わっている、の4点である。

出版者ドゥボシェによる序文には、『ジュネーヴ短編集』がよく売れたため改めて挿絵つきの完全版を刊行しようと思い至ったこと、テプフェールは自身の旅行記を挿絵つきで刊行しており本人に挿絵を描いてもらうのが一番であること、それまでもテプフェールは自身の著作の余白に挿絵を描いていたが「伯父の書斎」の素描をゲーテに称讃

⁸ Rodolphe Töpffer, *Nouvelles genevoises par M. Töpffer, illustrées d'après les dessins de l'auteur*, J.-J. Dubochet, 1844.

されたのが後押しとなったこと、などが書かれている。このときまでにテプフェールはパリでも充分に認知され、もはやグザヴィエ・ド・メーストルの威光を必要としなくなったのだろう。シャルパンティエ版にあった「牧師館」は、テプフェールが加筆して長編小説として別に刊行したため、この版では省かれている。新たに収録された2作は、「ふたつのシャイデック」はこの版が初出、「エリザとヴィドマー」は「ジュネーヴ万有文庫 *Bibliothèque universelle de Genève*」誌の1834年9月号に「遺産」とともに掲載されたのが初出（したがってシャルパンティエ版よりも前に書かれている）だ。どちらも他作品の異曲同工の感は否めないが、表題から分かるとおりドイツ語圏スイスの雰囲気を感じているのが特筆されよう。「ふたつのシャイデック」は舞台をベルナー・オーバーラント地方とし、主人公が旅先でイギリス人観光客どうしの女性をめぐる決闘騒ぎに巻きこまれる。「エリザとヴィドマー」は、主人公の父方の叔母がドイツ系で、若くして亡くなったエリザという娘がおり、その恋人ヴィドマーとの物語となっている。

ごく大雑把に二分すれば、地名が表題となっているものはアルプス各地での現地人と観光客との邂逅を描いた作品、そうでないものは半ばテプフェールの自伝めいた、少年から青年にかけての経験や苦悩などを描いた作品である。もっとも、テプフェール自身がジュネーヴに根ざした人間であるから、後者の作品であっても地域性は内容に深く関係している。ただし、その中では「渡航」だけが異色の作品で、主人公の幼馴染の僇僂が差別に耐えかねてアメリカに渡ったところ、アメリカでは僇僂に対する差別がなく実業家として成功して妻子をもうけ、その顛末を記した手紙を主人公が受け取る、という物語である。当時のヨーロッパから見たアメリカのイメージや、それぞれの大陸における差別の実情を描いており⁹、とても興味深いのだが、この作品のみジュネーヴやアルプスの地域性とはほとんど関係なく¹⁰、表題の「渡航」とは大西洋を横断してアメリカに渡ることを指している。サント＝

⁹ 僇僂は手紙で、アメリカでは身体障害者は差別されないが黒人が差別されている、ただ肌の色が違うだけでどうして差別されるのか、といったことを書いている。

¹⁰ アルプスの山岳地域は地場産業に乏しく、手に職をつけるにせよ起業するにせよ外国へ修行や就労に出かけねばならない、ということそのものが地域性といえるかもしれない。「牧師館」に若干そのような記述が見られる。ただし「渡航」では、あくまで出奔の原因は僇僂に対する差別という設定になっている。

ブーヴは、クレール・ド・デュラス「ウーリカ」とグザヴィエ・ド・メーストル「アオスタ市の癲病者」に並べて、障害を題材とした小説と評している¹¹。

もとより『ジュネーヴ短編集』という表題じたい漠然としており、パリで刊行するにあたって一種の異国趣味を喚起すべく便宜的につけられただけで、収録作品を拘束する性質のものではないが、のちに他の版元から刊行された同題のテプフェール作品集も、おおむね上に挙げたふたつの版の系統となっている。挿絵つきのドゥボシエ版を基にしたと思しき版は、このあとガルニエ（Garnier frères）などから刊行されている。一方、文章のみのシャルパンティエ版を基にしたと思しき版も、アシェット（Hachette）などから刊行されている。

2. クラシック／学校の言語

本題に入ろう。『ジュネーヴ短編集』において重要な地位を占めているフランス語でない言語のひとつは、ラテン語である¹²。スイス語なるものが存在しない以上、古典となるとラテン語まで遡らざるをえないが、テプフェールの場合、ヨーロッパにおける一般的な教養としての古典語というだけでなく、人生にとって重要な科目でもあった。というのも、冒頭で簡単に紹介したとおり、テプフェールにとって古代ギリシャ・ラテン語は、父のような画家になる夢を諦め、手に職をつけるために遅い年齢から始めた勉強だったからだ。パリ留学も終わりに近づいた 1820 年 5 月、このように母親へ書き送っている。

この道を探るには、まず自尊心と呼ばれるものを多分に捨てねばなりません、これはわたしがこれまで依怙地だった理由としては決して小さくないのです、というのも、わたしがかつて目指せたはずの自立した画家と、ギリシャ語やラテン語の授業をする教師とでは、少なくとも自尊心にかかわることについて、隔たりがあるからです。したがって、大いに、そしてしばしば退屈することを受け入れねばなりません、といっても成

¹¹ Charles-Augustin Sainte-Beuve, « Poètes et Romanciers modernes de la France. LXIII. M. Rodolphe Töpffer », *Revue des Deux Mondes*, n° 25, 1841, p. 856.

¹² この項については、とくに Daniel Maggetti, « Rodolphe Töpffer et l'Antiquité », *Études de lettres*, n°s 1-2, Université de Lausanne, 2010 を参照した。

功すれば何でもないので。それに、もしパパに訊いたら、絵画には絵画の退屈があると言うでしょう¹³。

確かに、古代ギリシャ・ラテン語は学校教育の科目として設定されているから、その教師を目指すのは打算的な路線変更としては有効な選択肢である。むしろ画家よりも職にあぶれる心配は少ないかもしれない。けれども「成功すれば何でもない」というときの「成功」とは、経済的あるいは社会的な成功ではあっても、自己実現という意味ではないのだ。

テプフェールは、進路を変更して早くも4年後には、古代ギリシャ文学の専門家であることを示すべく『デモステネス政治演説集』（共著）を刊行する。そして同じく1824年、妻の持参金をもとに自身の寄宿学校を開いた。同年12月の手紙では、こう書いている。

デモステネスの作品は、わたしを知らしめるためにとても都合のよいところでやってきました、そして、厳し目に判断したとしても、今なお学識の保証のようなものとなっており、肩書きのない人間にとっては非常に有用なのです¹⁴。

テプフェールが古典文学について学術的な研究を行なったのはここまでで、これ以降は自身の小説や旅行記、生徒を楽しませるための絵物語、批評であっても同時代の文藝・美術批評を書くようになる。もとより古典文学の専門家を目指していたのではないから、教師としての経歴が軌道に乗ってくれば研究を辞めてしまうのは致し方あるまい。

では小説の中でラテン語はどのように登場しているか。フランス語、あるいはヨーロッパの文学では、ラテン語の一節を格言のように引用して、自著の箔づけに使う用法が散見される。しかしテプフェールの場合、『ジュネーヴ短編集』においてラテン語はむしろ無味乾燥で時代遅れという印象を喚起し、またラテン語を多用する登場人物は堅物という設定になっている。滑稽さを演出するための道具となっているのだ。

¹³ Lettre du 14 mai 1820. Rodolphe Töpffer, *Correspondance complète*, éd. Jacques Droin, t. I, Droz, 2002, p. 480.

¹⁴ Lettre du 12 décembre 1824. *Ibid.*, t. II, 2004, p. 270.

テプフェールが最初に著した短編小説、そして『ジュネーヴ短編集』にも収録されている「伯父の書斎¹⁵」は、導入にあたる前口上に続いて、ラテン語の家庭教師であるラタン先生（M. Ratin）の授業で「テレマックの冒険」を拙いラテン語に訳す場面から始まる。主人公のジュールは、テレマックの物語を通して恋心という感情を覚えたものの、ラタン先生が恋愛に対してあまりに禁欲的な指導をするため、テレマックを恋人ユーカリスと別れさせたメントルを褒めるような意見を述べざるを得なくなり、物語を充分に楽しめず、それどころか後々まで尾を引く影響を被ったという。

これがわたしの初恋だった。まったく架空の恋だったから、続きも何もないのだが、ラタン氏の話によってこうして恋が抑制されたことは、わたしの他の恋に、この後の物語で見られるであろう、ある特徴を与えたのだ¹⁶。

「この後の物語で見られるであろう、ある特徴」とは、恋に臆病、好意を抱いた女性がいても引っこみ思案なためになかなか声をかけられない性格のことである。科目としてのラテン語教育が、作品を教材としてのみ使用するために本来の魅力を損なっているだけでなく、青少年の活力をも奪っているというのだ。

もっとも、ラタン先生は単に押しつけがましい教師として悪しざまに描かれているわけではない。むしろ主人公ジュールによる人物評では、人間的な、それゆえ生徒から見ると面白く憎めない先生となっている。

考えてみると、わたしの先生は奇妙な人物だった。道徳的だが学術的、尊敬すべきだが笑うべき、それゆえ立派でもあり滑稽でもあるという印象だった。けれども、誠実さに導かれ、規範に律せられていたから、そ

¹⁵ 「伯父」か「叔父」かは決めたいが、本文中に「84 歳」とあることから（p. 176）、本稿では「伯父」とする。なお、生まれは「1720 年ごろ」とも書かれているが（p. 168）、テプフェールの父ヴォルフガング＝アダムが 1766 年生まれ、テプフェール自身が 1799 年生まれだから、やや時代がずれている。もっとも、必ずしも伝記的事実との対照にこだわる必要はない。主人公ジュールは孤児ゆえに伯父が後見人となっている設定だが（この設定は「遺産」の主人公も同じ）、テプフェールは孤児ではない。

¹⁶ Rodolphe Töpffer, « La Bibliothèque de mon oncle », *Nouvelles genevoises*, Charpentier, 1841, p. 61-62. 本稿では『ジュネーヴ短編集』（以下 NG と略記）収録の作品はすべてシャルパンティエ版から引用する。

れらが行動と一致していたときは、いかにラタン氏が可笑しく見えようとも、器用で良識ある、しかしわたしに守らせようとする教訓と彼自身の守っている教訓が少しでも違っていると違和感を持ってしまうような先生よりも、わたしに大きな影響力を与えたのだ。

先生は極度の恥ずかしがり屋だった。道徳に反するといってテレマックを何ページか丸ごと飛ばし、わたしが惚れっぽいカリュプソに共感を抱かぬよう細心の注意を払い、世に出たらカリュプソのように危険な女性とたくさん出くわすことになるかと警告した。カリュプソを憎んでいたのだ。いくら女神でもカリュプソは大嫌いだった。ラテン語の作家については、イエズス会士ジュヴァンシーによる検閲済の版しか読まないようにしていた。そのうえ、この慎み深いイエズス会士が危険でないと考えた箇所さえもたくさん飛ばした¹⁷。

ここには、誠実に生徒と向き合おうとすればするほど立場上ときには抑圧的にならざるを得ない教師という職業そのものの宿命、そして相応の年齢の生徒であればそれを見抜いているであろうと分かっているもなお平静を装って指導を続けねばならない悲哀を読み取れよう。すでに教師を務めていた作者テプフェールは、主人公ジュールだけでなく、ラタン先生のほうにも近い立場であるはずだ。

さらに「伯父の書斎」には、ラタン先生のほかにもうひとり、何にでもラテン語を引用し、日常生活には場違いな会話をする人物が登場する。

わたしたちと同じ階に、もと中学校教師の老紳士がおり、40年間勤めて得た年金だけで暮らしていた。静かで陽気な美食家で、朝には小さな庭の花に水をやり、昼には決まって昼寝をし、夕食後には餌をついばんだり羽ばたいたりするように育てたカナリヤたちと一緒に夜風を吸いこんだ。とはいえ、昔の職業とは完全に縁を切ったわけではなく、一番の楽しみは、暗記している古典から文章を引いて、あらゆる物事や来訪者に当てはめることだった。わたしはかつて彼に教わっており、格言の響きに心地よさを感じないではなかった。だからわたしは好かれ、いつも会ったときは独特の方法で語りかけられた¹⁸。

この「かつて中学校教師をしていた老紳士」は、話の本筋とはまったく関係なく、ただ昔の思い出、もはや主人公の記憶の中にしか存在し

¹⁷ *Ibid.*, p. 63-64.

¹⁸ *Ibid.*, p. 183-184.

ない人物についての余談として語られている。この人物の「独特の方法」とは、会話をすべてラテン語の引用で行なうことだ。老紳士の引くラテン語は、ウェルギリウス、テレンティウス、ホラティウス、キケロと多岐に亘る。主人公は老紳士に気に入られており、また主人公のほうとしても「格言の響きに心地よさを感じないではなかった」という。

ところが、おかしいことに、老紳士は妻と話すときも同じ調子なのだ。ごく普通の家庭的な会話も、ほとんどラテン語の引用ばかりで済ませている。そのため妻は呆れはてているのだが、そのちぐはぐさを端的に表わしているのが、妻による以下の一言だ。

「50 年も学校で教えていたら、とても耐えられない不愉快なラテン語熱は治まると思ったんだがね。馬鹿げたことは学校でおしまいにして、皆と同じようにフランス語を話せないのかい¹⁹？」

夫婦の会話でラテン語とフランス語が互い違いに話される場面は、やや長い作品である「伯父の書斎」に息抜きめいた面白味を加えるとともに、学校での文法教育と日常的な話し言葉との対比を明らかにしてもいる。テプフェールにとってフランス語とは話し言葉なのだ。これはスイスのフランス語、すなわち正規の文法に則ったフランスのフランス語ではないスイスらしさの表われたフランス語なるものを考えるときの重要な拠りどころであり、スイス文学に関連づけて敷衍すれば、のちに C・F・ラムュが「ベルナール・グラッセへの手紙」において提起する、「学校のフランス語 *français d'école*」「習得した言語（そして結局のところ死んだ言語）*une langue apprise (et en définitive une langue morte)*」と対比された「野外のフランス語 *français de plein air*」をも先取りしている²⁰。先の老紳士が、退職後も教師だった頃の仕草を引きずっている、古典の引用で会話する、主人公の記憶の中にしか存在しない、といった何重もの設定で過去の人物だと強調されているのとは対照的に、あとの項で述べるとおり、その時その場で話される言語とし

¹⁹ *Ibid.*, p. 195.

²⁰ ラムュの手紙は C. F. Ramuz, *Salutation paysanne*, Grasset, 1929 に収録されている。テプフェール以降のスイス文学について本稿では触れないが、Jérôme Meizoz, « Le droit de mal écrire », *Actes de la recherche en sciences sociales*, n^{os} 111-112, mars 1996, Seuil, 1996 を参照した。

てテプフェールは山岳地域での土地の者の話し言葉を文字にして描いている。

ただ、急いで言い足さねばならないが、テプフェールはラテン語やラテン語教育を忌み嫌っていたのではない。それどころか、保守派の知識人として、当時のラテン語軽視の風潮を憂いてもいる。1835年の「進歩について、小市民および学校教師との関係において」という評論には、以下のような記述が見られる。

進歩は、われわれの仕事に首を突っこんできた。学校で何が行なわれているのか知りたがった。われわれの道具を並べさせた。道具が少し古く、ところどころすり減っているのを見ただけで、仏頂面をして言った。「腐っている。わたしに寄越したまえ」「しかし他の道具をくださるのですか?」「寄越したまえ」〔中略〕より早く追いつくために、進歩はギリシャ語を殺し、ラテン語を殺し、直接的でないもの、具体的でないもの、もっぱら知性や想像力、趣味、心、魂を養うものを、ことごとく殺そうとした。代わりに、ドイツ語、誰でもどこでも使えるドイツ語、望むのであれば英語、できることならイタリア語、あるいはイロコイ語でもよい、けれどもラテン語は駄目だと忠告してくる。進歩はラテン語に怯えるのだ、雄牛が緋色の布に怯えるように²¹。

「誰でもどこでも使えるドイツ語」とは、スイスのドイツ語ではなく標準ドイツ語という意味だろう。イロコイ語とは北アメリカ東部の先住民族の言葉で、何でもよいから今も話されている外国語として突飛な一例を挙げている。ともかくラテン語は死語であり使えないのだから学んでも無駄なのだ。このあたり現在の外国語教育の「実用性」志向とそれに対する反発にも似ている。

学校教育による統制を皮肉めかして描き、生きた言語によって小説を書こうと試みつつも、教師や名士としては古典語を擁護する二面性は、テプフェールの作品の基底を成す諧謔精神にも通じている。規範と逸脱を自覚的に往復してこそ、自己諷刺が可能となるのだから。

²¹ Rodolphe Töpffer, « Du Progrès dans ses rapports avec le Petit Bourgeois et avec les Maîtres d'Ecole », *Mélanges*, Cherbuliez, 1835, p. 158-159.

3. 英語とイギリス人

ラテン語が時代を隔てた異言語だとすれば、もうひとつテプフェールの作品において頻出するのが、場所を隔てた異言語、すなわち英語である。英語は『ジュネーヴ短編集』において、主にふたつの性格を帯びている。

ひとつは、スイスを訪れる上流階級のイギリス人の話す英語、あるいはそうしたイギリス人と会話するためにスイス人の話す英語だ。これは、先にロドルフの父ヴォルフガング＝アダム・テプフェールについて見たように、国外に画家の後援者を見つけるための外国語でもある。

「伯父の書斎」には、主人公ジュールの住む部屋の下の階にいる画家に、老父の肖像画を頼みに来た、ルーシーというイギリス人の若い女性が登場する。もうすぐ父親が亡くなりそうだから、肖像画を描いてもらうことにしたのだ。このときルーシーは、肖像画の背景にする公園の絵を馬車から取ってくるよう召使に英語で呼びかけるが、召使は休憩に出かけており、盗み聞きしていたジュールが代わりに取りに行く。

「……親切な子！　ということは、その子は英語が分かるのですね？」
「まさしく。彼はいつもあなたの同国人たちとの通訳をしてくれます。ありがたい少年だ！　残念なのは、藝術家になる運命にないことです、趣味や才能は藝術家に向いているのですが……」

画家は話を止め、立ち上がった。「お見せしましょう……ほら！　これは彼が先日この窓辺で描いた素描です……湖、牢獄の一角……喜捨を求めて通行人の手の届くところに下がっているぼろぼろの帽子は、美しい自然を見ることのできない気の毒な囚人の存在を示しています」

娘は感極まって言った。「素晴らしい構成！　……けれども、そんなに向いていそうなのに、何が問題なんですか？」

「後見人たちです。法曹の道を望んでいるのです」

「後見人たち！　……すると、あの子は孤児なんですか？」

「久しく前からです。年老いた伯父が教育費を出しているだけです」

「かわいそうな子！」若いイギリス娘はしみじみ同情した声で言った²²。

ルーシーは、ジュールの画家としての才能も、画家になりたいという希望も、孤児という境遇も、堅実な仕事に就くには画家を諦めざるを

²² Rodolphe Töpffer, « La Bibliothèque de mon oncle », NG, p. 98-99.

得ないという事情も、いちどきに理解し、また同情してくれたのだった。このあとルーシーは、ジュールがラタン氏や階下の画家とひと悶着あってジュネーヴを出奔しローザンヌの伯父の家へ向かうとき馬車に同乗させたり、ジュールに肖像画の複写を依頼することで初めて画家としての仕事を与えたりと、要所要所でジュールの人生の助けとなる。そして「伯父の書斎」の最後は、ジュールが伯父の死をルーシーに知らせる手紙で終わっている。

保養のためにスイスを訪れたり、スイス人の画家から才能ある者を見出して仕事を発注したりするイギリス人は、スイス人にとってありがたい外国人である。また、作中でルーシーは身内と話すときのみ英語なのであり、スイス人と話すときは流暢なフランス語で会話している²³。こうしたこともあって、ルーシーの話す英語はジュールにとって異国の薫りをまとった気品ある言葉として響き、その母国イギリスもまた、ルーシーに対する淡い恋心から、レマン湖畔の代わりばえのしない風景とは対照的な、魅力あふれる土地として夢想されるのだ。

ああ！ 彼女の想いを受けとめたい！ ところが、幸せの絶頂に代わり、話題が変わって二言三言のうちに、一週間後に彼女がイギリスへと発つことを知った。そのときわたしはどうなっているだろう、ラタン氏と対面して！ わたしは悲嘆に暮れた。

イギリス！ 魅力的な国、船の向かう国だ。涼しい海岸や木蔭の公園、憂いのある若いお嬢さんたちが散歩に行くところ！ ……ここでは何もかも魅力を欠いている。ここには愛すべきものは何もない。わたしは味気なく湖を眺めた²⁴。

テプフェール自身の伝記を辿ってみても、とりたててイギリスに憧れていた様子は伺えず、また文筆家としてイギリスや英語圏と深くかわりがあったわけでもないようだから、「伯父の書斎」でジュールの心情に表われているのは、作者テプフェールの経験というよりもむしろ、国際的な画家であった父ヴォルフガング＝アダムのイギリスとの交流、あるいは自身も画家を目指していた頃のテプフェール青年から

²³ もちろん小説上の設定であり、また文字になっている以上その調子までは分らないので書き言葉として読むほかないが、話し相手にも、また読者にも違和感を覚えさせない、正規のフランス語で書かれている。

²⁴ *Ibid.*, p. 99.

見た印象なのだろう。フランス語圏スイスにとって最も外国らしい外国語は英語なのだ。

他方で、スイスを訪れるイギリス人は、必ずしも好人物ばかりではない。『ジュネーヴ短編集』でも、地名を表題にした観光ものの作品には、気障な、そして現地人を半ば見下して打ち解けようとしない態度の表われとして、イギリス人による英語での会話が描かれる。その一例を「アンテルヌ峠」から見てみよう。

主人公は「わたし」となっており、名前は明示されていない。主人公は観光でシャモニーに来ており、せっかくだから険しい道でアルプスを越えようと、現地の猟師を案内人にしてアンテルヌ峠を行こうと考える。ところが、その猟師にはイギリス人観光客の先約がいるというので、同行させてもらえないかと、宿でイギリス人に話しかける。

わたしは、宿に到着したとき、この観光客が宿の玄関にいるのを見た。容姿端麗、服装も清潔で洗練された、あまりに上品な態度のジェントルマンであった、というのは、わたしが横を通ったとき、わたしの挨拶に返事をしなかったからだ。育ちのよいイギリス人にとっては、これが気品と社交儀礼のしるしなのだ。しかし、アンテルヌ峠まで案内してくれる唯一の現地人が先刻この観光客に雇われたと知って、シャモア猟師の手間賃を折半にして一緒に峠越えさせてもらわねばと思い、わたしは引き返した。

イギリス人はモンブランに向かって座っていたが、目もくれなかった。欠伸したところだった。親しさを示そうと、わたしも欠伸した。それから、英国紳士がわたしの人柄に慣れるために必要だろうと思って何分か待った末、わたしは自分を見せられた、紹介できたと感じた。今だと思った。わたしは小声で、誰とはなしに言った。「壮大大！ 崇高な風景だ！」

何の反応もなく、返事もなかった。わたしはありったけの愛想を込めて言った。「シャモニーから来られたのですか？」

「ああ」

「わたしも今朝そこを登って来ました」

イギリス人はまた欠伸した。

「途中でお見かけしませんでしたね。ということは、バルム峠を通して来られたのですか？」

「いや」

「ブラリオン山ですか？」

「いや」

「わたしは昨日テット・ノワール山を通して来ました、明日アンテルヌ

峠を越えようと思っています、案内人がいれば。あなたは案内人をひとり見つけられたそうですね？」

「ああ²⁵」

イギリス人は無愛想にも「ああ」か「いや」としか言わない。この生返事は、それぞれ«Ui»と«No»という、英語とフランス語の中間のような綴りで書かれている。また、会話の前の部分で「ジェントルマン *gentleman*」「紹介 *introduire*」が強調（原文イタリック）されているのは、いわゆるアングリシズムであることを示しており、いずれも視覚的に外国語を異化している。

主人公は別の牧夫に案内人を頼もうとするが、持っていた旅行案内を元にアンテルヌ峠の標高と万年雪の限界線を計算で示し、雪も氷河もない安全な道だと説明しても、納得しない。

牧夫は土地の言葉で言った。「あてにならん！ お前の書く数字は分からん、しかし実際、2年前、ここで、同じ月に、ひとりのイギリス人が雪に取り残された。そいつは息子だった。涙を流して嘆き悲しむ父親を見たんだ。ルノーの家に迎えいれて、乾燥ナッツや肉やパイを差し出した。何の役にも立たなかったよ。欲しかったのは自分の息子だ。36時間後に戻ってきたが、それは死体だった²⁶」

牧夫の最初の言葉は«Mâs'y fias !»と書かれ、«Il ne faut pas s'y fier.»と原註がついている。本当に土地の言葉で書かれているのだ。土地の言葉を話す者こそ土地の事情に精通しているというわけだ。実際、このあと主人公とイギリス人たちは峠越えを強行するが、標高が上がるにつれて辺りは一面の雪原になってしまう。

「アンテルヌ峠」は20ページ程度の短編であり、話の筋としては、現地の案内人を小馬鹿にしていたイギリス人の紳士と娘が忠告を無視した結果アンテルヌ峠で嵐に遭い、案内人の機転でどうにか無事に脱出して、最後には食事を共にして感謝と反省を述べる、という単純な物語だが、会話が全体的に口語をそのまま文字にしたような書き方になっているところに特徴がある。とくにイギリス人の話す言葉が、現地人との会話も、イギリス人どうしでの会話も、すべて英語訛りのフランス語で書かれているのだ。

²⁵ Rodolphe Töpffer, « Le Col d'Anterne », *NG*, p. 298-299.

²⁶ *Ibid.*, p. 301.

原文の綴りを見てもらおう。ここでの登場人物は、イギリス人の紳士、その娘、案内人の 3 人であり、この会話の前には「無作法な口ぶりに、英国紳士は明らかに面喰らっていた。返事をする前に、娘と英語で議論しはじめた。読みやすくするため、この会話はイギリス人がフランス語で会話するときに使うような言葉で再現してみる」とある。

Milord à sa fille : Cette guide avé iune très-irrévérencious manière.

— Il me paraisse iune stiupid. Disé à lui que je ne voulé paartir que si la ciel n'avé pas iune niuage.

Milord au guide : Je ne voulé paartir que quand la ciel n'avé pas iune seule niuage.

— Eh bien, c'est pas ça ! repartit le guide. De grand matin il y aura des nuages, je vous en préviens ; et tout de même il faut partir de grand matin. Laissez donc, nous connaissons le temps et les endroits, nous autres !

Milord à sa fille : C'éte iune fourbe. *Au guide* : Je disé à vos que je ne voulé paartir que quand la ciel n'avé pas iune iunique niuage²⁷.

おそらくイギリス人の父娘は英語で喋っているのだろうが、それもすべておかしな綴りのフランス語で表わされている。

「アンテルヌ峠」では、地の文であるフランス語に対して、山の民が話す方言としてのフランス語、観光に来たイギリス人が話す英語あるいは片言のフランス語、のふたつが対置されている。奇妙さでいえば、方言のフランス語よりも、イギリス人のフランス語のほうが、発音においても内容においても滑稽であり、見て分かるよう強調されたり綴りを変えられたりしている。ただ、こうして比べてみると、スイスのフランス語は、国際語としてのフランス語（パリ語）でもないが、土地に根ざした地域言語（パトワ）でもないため、何を標準とすべきか定めがたい難しさがあるのも確かだ。

²⁷ *Ibid.*, p. 303.

4. 地質学者の旅記

作中にラテン語と英語が違和感を催させる言語として挿入されていることから、テプフェールが現在かつ現地の言葉を尊重しようとしているという大まかな傾向は分かったが、とはいえテプフェールもまた山国の民ではなく、アルプスへは物見遊山に行っている。地元ではないが外国でもないスイスの山々を、どのように描こうとしているのだろうか。ここからは、言語の違いをより広い意味で考え、フランス語ではあるものの自分とは異なる文体として作中に登場させているアルプス描写を見てみよう。

ひとつは地質学者によるアルプス観察記である。シャモニーからマルティニーまでの峠越えを描いた短編「トリヤン溪谷」では、主人公の「わたし」がイギリス人ふたりとフランス人ひとりと道中を共にし、イギリス人は礼儀正しく無口で皮肉っぽい、フランス人は陽気で女性に優しく料理好きといった、やや戯画化された描写で対照される国柄と性格が主題となっているが、その中で、道すがら地質学者の集団とすれ違ったのを契機に、話の本筋とは関係のない地質学礼讃が長々と挿入されている。

小説内で起こった出来事としては、旅の道連れを探していた「わたし」が、ある一団を見かけて加わったのだが、それは地質学者の集団で、道中「わたし」の腰かけた石を地質学者たちが観察しはじめたため、その隙に「わたし」はそっと立ち去った、というだけである。主人公の「わたし」は地質学者たちと何も会話しておらず、むしろ避けて先を急いだのだ。ところが、そのあと2ページほど、いかに「わたし」が地質学を愛好しているかが述べられる。

18世紀後半から19世紀前半にかけては、オラス＝ベネディクト・ド・ソシュールによる地質学やジョルジュ・キュヴィエによる古生物学の勃興した時期であった。とりわけ1779年から1796年にかけて全4巻で刊行されたソシュールの『アルプス旅行記』は、学術的な研究書にとどまらず、スイスの山岳風景への興味をかき立て、ルソー『新エロイズ』とともに18世紀後半のスイス観光ブームを牽引した²⁸。

²⁸ ソシュールの地質学については、Albert V. Carozzi, « La géologie : De l'histoire de la Terre selon le récit de Moïse aux premiers essais sur la structure des Alpes et à la géologie expérimentale 1778-1878 », dans *Les Savants genevois dans l'Europe intellectuelle du XVIII^e au milieu du XIX^e siècle*, éd. Jacques Trembley, Editions du

ソシュールは、アルプスにこそ地球造成を解明する鍵があると考え、登山という発想すらない時代にあつて、実地探索のために7回も登攀したのだった。この頃の地質学は、黎明期ゆえ現在の観点からすると誤った学説も多く見受けられるが、テプフェールはむしろ、そうした定説のなさこそ惹かれたようだ。「トリヤン溪谷」での地質学礼讃も、科学というより文学として評価しているかのような書きぶりである。

地質学は無限で、茫漠として、まるで詩のようだ。あらゆる詩がそうであるように、謎を探り、謎を呑みこみ、謎の中に漂いながらも溺れはしない。幕を取り除くのではなく、幕を揺さぶって、たまたま開いた穴から何筋かの光線が差しこんで目を眩ませる。苦勞して理解力の助けを求めずとも、想像力を友として、一緒に暗黒の地底へと向かう。あるいは世界のはじまりの日に遡って、若く青い大陸に想像力を散歩させるのだ、混沌から生まれたばかりの、原始的な姿で輝く大陸を闊歩するのは、巨大な痕跡のみが今日その存在をわれわれに明かしてくれる、絶滅した種である。地質学は、世界の果てに到達しなくとも、最果てを目指しながら楽しい道を歩くし、二次的原因について絶えずの外れな戯言を述べるが、あちこちで、非力であるからこそ、われわれを第一原因に向き合わせてくれる²⁹。

そしてギリシャ神話や『創世記』さえも古代の地質学書なのだという。これだけ読むと、突飛な空想ゆえに地質学を称えているようにも思われるが、テプフェールがソシュールについて評価しているのは、想像力に訴えかける仮説のほうではない。まさしくソシュールを主題に据えた論説「ド・ソシュールの旅行記における^{ド・トレスク}絵画的な部分について」を参照すると、ソシュールという「ひとりの学者、気圧計と湿度計のひと」の地質学書を「同じ場所に来て詠んだり描いたりした多くの画家や詩人たち」よりも巧みにアルプスを描いた良質の旅行記と看做すべき理由が述べられている。

ド・ソシュールは、自然学や自然史を研究するため、つまり真面目な目的、夢中になった精神、活発な身体を持ってアルプスを歩きまわり、旅

Journal de Genève, 1987 ; Albert V. Carozzi, « Forty Years of Thinking in Front of the Alps : Saussure's (1796) Unpublished Theory of the Earth », *Earth Sciences History*, vol. 8, n. 2, History of Earth Sciences Society, 1989 を参照した。

²⁹ Rodolphe Töpffer, « La Vallée de Trient », *NG*, p. 350-351.

の魅力、道の美しさ、研究にともなう生き生きとした新鮮な感覚を恵みとして受け取る。夜、山頂の山小屋で、満足し、自信を持って、日記をつける。そのとき、科学の狭間に、その日の描写、記憶、観察が滑りこむ。すると、凝っていないからこそ真正であり、真正であるからこそ絵画的で詩的な、千もの真の描線が筆先から現われるので、何も考えず、忠実で素朴で善良さに溢れた絵を描くと、そこには彼をとりまく雄大な景色と彼自身の受けた印象とが同時に表わされている³⁰。

テプフェールが褒めているのは、まずもって観光客としての固定観念を捨てて見たままの自然を描くこと、科学的な観察によって誇張なしのアルプスを書き留めることである。先に現実の風景があり、それを忠実になぞった旅行記だからこそ詩的になるのであって、あらかじめ詩的な道具立てを用意して構えては逆効果なのだ。スイスらしさを求めて来る観光客あるいは詩人ほど凡庸な見方しかできず、科学的な普遍性を志向して記録をつけるソシュールのほうがアルプスの地域性を描けているとする、一種の逆説がある。テプフェールは「著者が詩人になろうと全く考えていなかっただけにいっそう本物の詩情に溢れている」として、ソシュールの以下の一節を引用する。

わたしたちは頂上付近で 2 匹の蝶しか動物を見なかった。片方は小さな灰色のシャクガで、最初の雪原を横切った、そしてもう片方はマキバジヤノメと思われる昼行性の蝶で、頂上から 100 トワーズほど下の、モンブランの最後の斜面を横切った。わたしはこうした昆虫が氷河に入ってゆくのを何度か目撃していた。氷河に接する草原を飛びながら、雪や氷の上へと進む。地面を見失ったときは常に前進し、どこで着陸したらよいかわからず、少しでも風の支えがあれば最も高い頂上まで飛ぶが、そこで疲れ果てて落ち、雪の上で死ぬ³¹。

雄大な山の頂上ちかくで、ソシュールは銜いなく小さな蝶 2 匹に着目し、かつ花園ではなく氷河の上を死に向かって飛ぶ姿を見たままに描く、その個別性が詩情となっている。

³⁰ Rodolphe Töpffer, « De la partie pittoresque des voyages de De Saussure », *Mélanges*, p. 104-105.

³¹ *Ibid.*, p. 108-109. ソシュールの本の引用元は Horace Bénédicte de Saussure, *Voyages dans les Alpes précédés d'un essai sur l'histoire naturelle des environs de Genève*, t. IV, 1796, p. 206.

続けて、ソシュールは科学者として優れた観察眼を持っていただけでなく、優れた作家であれば持っているであろう精神的な資質を備えてアルプスを歩いたからこそ、素晴らしい旅行記を書けたのだと述べている。

この作品でわたしが感嘆するのは、高度かつ繊細な、厳しくも愚直な、偉大なものを受け入れつつも小さなものを軽んじない、その観察精神だ。哲学的でありながらも穏やかで晴れやかな、モールの斜面を背にした素朴な山小屋のまわりに愛すべき草原を見つけ、モンブランの凍った荒野を前にして壮大な思考のできる、その好奇心だ。美しさを誇張せず、偶然の出来事を平凡な現象に、珍しいものを驚異に、特異なものを奇跡に仕立てあげることなく、いつでも正確な現実のうちに充分な糧を見出す、豊かな、そしてとりわけ高尚な、その想像力だ。しかし、ド・ソシュールにおいては、真実への愛が際立っており、最も輝かしい能力を和らげている。描写や詩情にも、学問と同じ忠実さ、同じ純真さがある。とても珍しい、それ自体が非常に興味深い現象である³²。

テプフェールの讃辞はソシュールの学者や作家としての資質に留まらず、人柄にまで及ぶ。山の人々に対して友情をもって接する善良な旅行者の理想像をソシュールに投影している。ここにソシュールの特徴として挙げられているのは、まさしく『ジュネーヴ短編集』に登場する観光客たちに欠けているとされた態度だ。

この作品でわたしが好きなのは、そして著者と結びつけて考えているのは、ともに過ごす貧しい山の人々のほうへと常にド・ソシュールを駆り立てる、博愛と思いやりの感情である。温かく明るい親切心で彼らを受け入れ、偏見を許し、艱難辛苦に同情し、粗末な外見に隠れた素晴らしい資質を評価する。案内人たちと話し、その意見に興味を持ち、友達となる。自分に尽くしてくれる素朴な人々の尊敬、献身、友情に対して、金銭的な報酬で間に合っているとは思わないのだ。真正かつ貴重な品格であり、美しい魂、健全な心、実直で善良な人格の表われだ³³。

皮肉なことに、ソシュールによってアルプス観光ブームが興った結果、ソシュールのようにアルプスを旅する者はいなくなってしまった。

³² *Ibid.*, p. 109-110.

³³ *Ibid.*, p. 113.

いたるところ観光地として整備され、何でも商売となった。先の論説のうちにも、その現状が悲しげに綴られている。

ド・ソシュール以降、道路が拓かれ、山頂までホテルが広がり、馬車や騾馬や駕籠がどこにでも入りこむようになって、幾人かの玄人によって守られてきた大いなる秘密は、人混みの中に消え失せてしまった³⁴。

『ジュネーヴ短編集』に収録されている一連のアルプス旅行もの、「アンテルヌ峠」「ジェール湖」「トリヤン峠」「グラン・サン＝ベルナル」が書かれるのは、初出が 1834 年である「ド・ソシュールの旅行記における絵画的な部分」よりも後である³⁵。これらの短編を書くとき、同じジュネーヴ人であり、テプフェールの生まれた 1799 年に亡くなったソシュールの旅行記が、念頭にあったであろう。

5. アルプス旅行記

地質学書の旅行記とは対照的な、いかにも観光客らしい旅行記も、『ジュネーヴ短編集』に収められている。今度は「グラン・サン＝ベルナル」から、そちらを見てみよう。この短編は、観光客の冒険譚がいかに都合のよい手柄話であるかを揶揄するのが主題となっているが、興味深いのは、その冒険譚というのが単なる座談だけで終わらず、本となって流通し、まったく事情を知らない読者を感動させるまでが物語となっている点である。

主人公の「わたし」は、グラン・サン＝ベルナル峠の宿坊で火に当たりながら、神父と、もうひとり別の宿泊者の男と喋っている。そこにフランス人の観光客が入ってきて、今しがた雪崩からほうほうのいで逃げ出してきたところだと言う。しかし季節は 7 月末で、周囲の山に雪はなく、雪崩など起こりそうもなかった。主人公は訝しむが、あえて反論はせずに話を促すと、観光客は続けて、ちょうど居合わせた父と娘、そして娘の婚約者の 3 人を、怖気づく地元の案内人を押しのけて、自分が勇敢にも雪崩から救い出したのだと語る。そこまで一

³⁴ *Ibid.*, p. 112.

³⁵ 「牧師館」「伯父の書斎」「遺産」「恐怖」といった自伝ものは「ド・ソシュールの旅における絵画的な部分について」よりも前。「渡航」はどちらとも分類しがたいが、前か後かでいえば後。

気にまくし立てて満足したのか、この観光客は部屋に入ってしまうが、そこに入れ違いでやって来た当の 3 人から本当の顛末を聞いて、その男の武勇伝は全て作り話であったと知る。はるか谷底の雪を見た男が、雪崩と勘違いし、ひとりで慌てふためいていただけたと分かって、一同は笑うが、最初にいた男だけは、きっと浅はかな同国人だろうと思って、情けなくなり憤然と炉端を立ち去る。

以上が話の本筋である。これだけでも十分に面白く、テプフェールらしい剽軽な技巧が効いているが、「グラン・サン＝ベルナール」にはもうひとつの筋がある。

全員が部屋に戻ったあと、主人公の「わたし」は、隣の部屋の、先ほど冒険譚を語った観光客の様子が気になって、壁の隙間から覗き見る。

すると、観光客がベッドに座って、布団と帽子で暖かくし、ペンを持って、執筆に没頭している様子だったので、わたしはとても驚き、そして少し当てが外れた。ベッドの横には、湯気を上げているポットとさくらんぼ酒の小瓶があった。ときどき筆を止めて読みなおし書きなおし、顔には素朴な満足の笑みから真剣な感嘆までさまざまな表情を浮かべていた。そのうち、自分の文章を小声で朗読して楽しみたくなったようで、読み上げられた一節からは、大型犬と紫、そしてエマという娘の名だけが聞き取れた。わたしは、この観光客は作家で、おそらくアレクサンドル・デュマ流の旅人で、その日の印象や記憶や災難を書きとめるのに忙しいのだらうと思った。それで、好きに仕事をさせておこうと、わたしは眠りについた³⁶。

この観光客は、冒険譚を一座の楽しみとするだけでは飽き足らず、旅先でありながら夜も熱心に旅行記を書いているのだった。途中で言及されているアレクサンドル・デュマとは大デュマのことで、イタリアやマグリブ諸国やカフカスなどあちこちを旅して多くの旅行記を書いたが、最初に著したのが『旅の印象』と題したスイス旅行記である。1833 年から『両世界評論』で連載が始まるやいなや好評を博したが、事実無根の逸話が多く、現地からは苦情が絶えなかった。とりわけ初回到掲載された、マルティニーの宿で熊のステーキを出されたという話は、まだアルプスの山中には熊を食べるような田舎が残っていると

³⁶ Rodolphe Töpffer, « Le Grand Saint-Bernard », NG, p. 408.

いう演出のための完全な創作なのだが、のちに真に受けた観光客が相次いで宿を訪ね、いたく主人を憤慨させたという³⁷。テプフェールが、この観光客の書きとめるものとして最初に「印象 impressions」を挙げているのは、デュマの『旅の印象 *Impressions de voyage*』を意識していることだろう。

主人公の「わたし」は、グラン・サン＝ベルナル峠でアルプスを越えたあと、ジェノヴァ、フィレンツェ、ローマ、ナポリをめぐり、帰路はシンプロン峠でアルプスを越えた。そして、作中では「昨年の秋」とされているジュネーヴに戻ったとき、主人公はサラという叔母の家を訪ねる。この叔母は、同じ年くらいの女友だちを集めて、朗読会をしていた。

叔母は、若いころ教師だった優しい母親として、教育的に抑揚をつけ、論理的原則どおり、最も厳格に綴字の規則に従って正確に読むので、聞き心地よかった。叔母は眼鏡を鼻にかけ直すと、朗読を再開した。

「……この少女は、内なる悲しみによって、夕暮れの帷のように青みがかった後光に包まれた、女性の白い影のひとつだった。少女は、心の深淵を埋めて自己の存在を完全にしようとする魂の密かな願望を理解できない父親の権威に苦しむのを運命づけられており、痛みを抱え嗚咽を押し殺して憔悴していた。アペニン山脈の明るい斜面で咲くはずだった植物が、ヘルヴェティアの寒い斜面の只中で芽吹かねばならなかったため、輝かしく花開こうとしたところで、高地の冷たい風のせいで、固く青白い花萼に閉じこもるしかなかったのだ³⁸」

この仰々しい文体を叔母は褒め称え、女友だちも同調するのだが、朗読が進むにつれて「わたし」は次第に事情を察する。この旅行記の著者は、サン＝ベルナルの峡谷で雪崩に遭ったというのだ。そして、観光客によって雪崩から助け出された娘の名は「エマ」といい、「紫」の唇に安堵の微笑みを浮かべ、宿坊から「大型犬」が助けに来る。まさしくグラン・サン＝ベルナル峠の宿坊で隣の部屋にいた男が書き、そして得意げに朗読していた旅行記なのだ。この3つの単語で確信した「わたし」は噴き出してしまい、叔母たちの怒りを買って、急いで

³⁷ 石川美子「旅行記における事実と虚構 アレクサンドル・デュマ『旅の印象』をめぐる」、『仏語仏文学研究』第55号、東京大学仏語仏文学研究会、2022、p. 109-125。

³⁸ Rodolphe Töpffer, « Le Grand Saint-Bernard », *NG*, p. 416-417.

謝りながら立ち去る、というところで「グラン・サン＝ベルナール」は終わる。

短かい作品のうちに二段構えで笑いどころが作られており、よくできた構成の短編となっているが、そうした話の面白さだけでなく、当時のアルプス観光が旅行記の出版まで含めた一大流行産業となっていた様子も伺える。主人公の「わたし」が夏にグラン・サン＝ベルナール峠の宿坊で出会った観光客、そしてのちに叔母の家で朗読を聞くこととなる旅行記の作者は、作中の記述を読むかぎりでは、とりたてて有名な作家ではなく、一介の観光客が趣味で日記をつけているにすぎない。ところが、「わたし」がイタリアをまわって秋にジュネーヴへ戻ると、もう旅行記が出版され、まったく関係のない叔母の手許にあり、事実を知っている「わたし」は持って回った文体に鼻白むが、叔母たちは朗読を聞きながら感動している。

テプフェールの『ジュネーヴ短編集』は、こうした旅行記がジュネーヴにさえ溢れており、観光的な視線を内在化したアルプス像が受け入れられているところ、別の仕方でもアルプス徒歩旅行を描き、旅行記とは違った形でのスイスの自己表象を試みたのだ。他の短編では作品そのものの文体によって示されているのだろうが、この「グラン・サン＝ベルナール」では、作中に俗流の旅行記を登場させ、舞台裏を明かすかのように執筆の場面から朗読の場面までを戯画化することで、当時のアルプス旅行記への対抗心をより露わにしている。

結論

以上、ロドルフ・テプフェール『ジュネーヴ短編集』において異物として描かれる言葉から逆照射する形で、フランス語圏スイスの言語について若干の考察を試みた。テプフェールは、学校教師のラテン語と観光客の英語を作中で滑稽に描くことで、時代錯誤や場違いな言語を諷刺していた。裏を返せば、地の文として想定されているのは現在かつ現地の言語ということになるが、しかしテプフェールとて山村に住んでいるわけではなく、アルプスを訪ねて小説に描こうとするテプフェール自身も半ば観光客であるのは否めない。よそ者がアルプスを周遊し、土産話を書き記すとしたら、参考にすべきは地質学者の態度である。先行の観光案内本を追認し、型にはめるべく誇張された旅行

記よりも、徒歩での仔細な観察をもとに想像力を羽ばたかせる、土地に根ざしたフィクションとしての地質学のほうに、テプフェールは惹かれていたし、テプフェールによる小説もまた類似の性質を持つことで、当時流行していた装飾華美なアルプス旅行記とは一線を画そうとしている。

もちろん『ジュネーヴ短編集』について、ここに挙げた以外にも、さまざまな観点から論じることが可能だろう。たとえば、本稿ではデュボシェ版で追加されたテプフェール自身による挿絵については全く参照しなかったが、森田直子のように、テプフェールの漫画においては絵も文字も同じ描線で書かれていることから、両者を分離せず一体的にテプフェールの文体と捉えて分析することもできよう³⁹。あるいは朝比奈美知子の指摘するように、19世紀ラルース大事典の「遊歩する flâner」の項に「テプフェールによれば、遊歩するとは無為とは正反対である（サント＝ブーヴ）」、「遊歩 flânerie」の項に「遊歩を知らない者は、生から死へと向かう自動機械だ（テプフェール）」とあることに着目して⁴⁰、グザヴィエ・ド・メーストル『部屋をめぐる旅』から引き継がれた「遊歩」の実践をテプフェールに見出し、のちの19世紀パリで花開くフランス文学の先駆的な要素を指摘することもできる⁴¹。また、テプフェールはどちらかといえばアルプスのサヴォワ方面をよく描いているが、本稿で行きしなに触れるにとどめたドイツ語圏スイス方面との関係についても、もっと掘り下げる余地はあるだろう。

いずれにせよ『ジュネーヴ短編集』は、ここまでに取りあげられなかった主題を数多く含んでいるから、テプフェールの漫画だけでなく小説について、さらには、ともすればフランス語圏文学という旧植民地文学に偏りがちであるが、ヨーロッパにおけるフランス語圏文学についても、今後いっそう研究が進むことを期待したい。

³⁹ ロドルフ・テプフェール『復刻版 観相学試論』、森田直子訳、オフィスヘリア、2013。

⁴⁰ Pierre Larousse, *Grand dictionnaire universel du XIX^e siècle*, t. VIII, 1872, p. 436. 出典は、サント＝ブーヴは«Nouveaux Voyages en Zig-zag de Töpffer», *Causeries du lundi*, t. VIII, 1854, p. 341 (のち *Nouveaux Voyages en Zigzag* の第二版 (1858) 序文に«Notice sur Töpffer»として収録)、テプフェールは«La Bibliothèque de mon oncle», NG, p. 119.

⁴¹ 朝比奈美知子「偶然の靈感と新たな芸術 ロドルフ・テプフェールの遊歩」、『国際文化コミュニケーション研究』第2号、東洋大学文学部国際文化コミュニケーション学科、2019、p. 53-66。